

らかになった。

クモイハタザオは、牧野氏によって *Arabis tanakana* Makino と名づけられたが、和名は現在クモイナズナと改められている。

またこの年に発行された信濃博物学雑誌には、次のような研究を発表している。

4号(4月25日発行) *Potentilla matsukana* Makino (ユキバキンバイ) について。

この植物は、田中の先輩松岡(後に岡田と改姓)邦松氏が1902年8月20日戸隠山で採集したもので、現在はウラジロキンバイと呼ばれているものである。

5号(5月25日発行) ゲンジスミレの研究。

6号(7月15日発行) ミヤマナズナ (*Draba sinanensis* Makino) について。

7号(10月25日発行) クモマキンポウゲ (*Ranunculus tanakae* Makino) について。

8号(12月25日発行) 白馬岳・館ヶ岳における植物分布の状態。

1904(明治37)年 23才、3月古牧小学校を退職して、4月牧野富太郎氏のあつ旋によって東京駒場の農科大学の助手として池野成一郎教授のもとで勤務する。

1912(明治45)年 31才、農科大学辞職。

1913(大正2)年 32才、合資会社帝國駒場農園を設立し、その技術長として農産物種子の検査、苗木の育成販売、特に全国小学校の学校園植物の普及の事業を行う。

1916(大正5)年 35才、この年より8年間、牧野富太郎氏の日本植物図鑑(大正14年発行)編集の

仕事に協力する。

1928(昭和3)年 47才、「科属検索日本植物志」を牧野富太郎氏と共著。この稿のために約4,000の植物説明図を用意したが1923(大正12)年の大震災で罹災し、全部を失ってしまったので、その後の図212をこの書にのせている。

1944(昭和19)年 63才、戦争のため郷里に疎開。

1965(昭和40)年 84才、郷里において死亡。

氏は師範学校生徒の頃、島崎藤村と交際があり、その著「信濃の花」には当時島崎藤村から送られた西詩9編のうち4編をおさめている。

藤村の作品「破戒」の人物土屋銀之助は氏をモデルにしたものだといわれている。

土屋は瀬川丑松と師範学校時代から同窓の友であったこと、植物採集に興味をもっていたこと、農科大学助手として上京すること、などでよく氏の行動と一致する記述が「破戒」の中に見られる。

参考文献

田中貢一氏夫人田中小夏様の手紙。

田中貢一著 信濃の花(明治36年刊)

信濃博物学雑誌(1~23号)(明治35~40年刊)

牧野富太郎著 日本植物図鑑(大正14年刊)

牧野富太郎・根本莞爾共著 日本植物總覧(昭和6年刊)

牧野富太郎・田中貢一共編 科属検索日本植物志(昭和3年刊)

信州自治 第28巻10号 『田中貢一著「信濃の花」』

大井次三郎著 日本植物誌(昭和53年刊)

牧野富太郎先生を偲びて

正 宗 徹 敬

つれづれなるままに、冬の一、本棚の整理をしていたところ、牧野先生から小生に宛てた古い封筒が見つかった。中味がないのが残念であるが、先生一流の正確な楷書で、墨で丁寧に小生の住所が書かれており、大正二年十月二日と年月日が記されている。又先生の住所は本郷西片町十番地ほの五号となっている。先生は恐らく、郵便物が正確に配達されるのと、これを扱かう人に迷惑が掛からないようにとの御考えになって、このように何時も御書きになったのではないかと私は考える。というのは手紙などの宛名は必ず楷書でかいておられたのでもわかる。

私が先生から御手紙を戴いたのは恐らく、この手紙が最初であったのではないと思われる。肝心の内容がないのでわからないが、大正二年というと私が十四才の時だからまだ小学校にいた時で、牧野先生に植物の鑑定を御願いした時の御返事ではなかったかと考える。この頃は今のような牧野植物図鑑といった、便利な本もなく、植物を調べることが極めて困難であったので、私はまだ子供であったが、手紙を出して牧野先生に教えを乞うたのであった。先生はこの小供の私の御願いをこころよく聴いて下さったことであった。

昭和三十一年十月、私は東大泉の牧野先生の御宅に見舞にあがった。先生はベットにやすんでいられたのでそっと拝顔して帰った、これが先生との御わかれであった。この時御令嬢の鶴代さんが、「おとうさん、正宗さんですよ」といわれたので、先生は私の方を見て、にっこりされたようであった。

大正二年から昭和三十三年、四十三年のあいだ、先生の教えを受けたが、大学在学中の三年間は特にしたしく先生に接する機会が多かったことはいまでもない。

この長い間の先生についての思い出は数かぎりなくあるが、それらの中から少しばかりを引出して次にあげて見よう。

昭和三十年のことだったと思うが、私が先生を御訪ねすると、先生は床で休んでいられたが、その近くにおいていた、飯沼慾齋の草木図説の五巻をとり、その三十六図のところを開くようにと、先生がいわれるのでその頁をあけると、そこにウドモドキという繖形科の植物がでていた。「この物は能登産となっているが、これがまだよくわかっていないので、これさえわかれば、草木図説に出ている植物は全部わかるのだから、幸いその地にいられる君は、この植物を研究されるとよい」というような事を先生は言われた。このように先生の記憶のよかったことはおどろくべきほどであった。

先生は、また極めて、ユーモラスな仁で、採集に野外に出た時などは、しばしば、面白い御話をうけたまわった。学生として最初の野外指導をされた時だったと思うが、学生の一人が、アカネを持ち先生に、これは何ですかと質ねると先生は一寸考えていられたようでしたがすぐ「ネカア」と答えられた。学生の方は何んだかわからないような顔をしていた。

その頃の先生の夏の麦稈帽子の内面には、一土くさく、また肥くさき、大泉村に住まう、牧野こそわれ——と書いていられた。また能く、「一生を貧乏でくらす 富太郎 とんだろうとは とんだまぢがい」といううたを紹介されていた。

先生は東大の講師として、一学期間ほど、講義を

されたが、その期間に実際に講義をされたのは、二、三度であったかと思う。そして私は大学の先生というのは良いなあ、と思った。先生の講義というのは、午後一時頃からはじまることになっていたが、先生が大泉の御宅を出られるのが、その時間のはじまる午後一時頃なのだから、どうしても先生が教室に着かれるのは二時すぎになる。私たち学生は先生の講義のある日には、なにか菓子などを買って、先生を御まちしていた。

先生は植物を多量に採集されるので、有名であったが、ある時東京近郊の或地に採集に行かれた時、何か竹の種類をみつけられたので、その持主に相談されたところ、いくらでもほしいだけ採ってよいということであったので、次の日に荷車を持って行きそれに一ぱいその竹を採集してこられたという談えうかがった。

平塚に採集に行った時、駅まで帰ってきた所先生はまだ早すぎるから、もう一度採集に行こうといわれて、暗くなるまで採集したことがあった。このように先生は採集に熱心である上に、標品をつくるのも熱心で、旅行中はいつも、夜のふけるのもわすれて、標品をつくっていられた。

先生は肉が非常におすきで、私が台湾から上京して、先生のお宅を訪門すると、必ずといってよいほど御馳走にあずかったが、それは何時も、東京の一流の料理家でしかも、肉の料理を主としたものであった。

先生は植物の図を描くことには、天才的の技能を持っていたのは、人の能くしるところであるが、私が先生にどうして先生はそんなに図が御上手なのですかと、たずねたところ、先生はわらいながら、「天性 えをよく描くだね」といわれた。併し、「英国のフィッチは植物のえ描としては一番だね、私もあれ程は描けないが、あのよう、やわらかく描くように努力している」このようなことをいわれたことがあった。

以上甚だとりとめのない事をかいて紙面をふさぎましたことを御わびします。

〔新刊紹介〕池上義信（監修）・石川進（編集）「新潟県植物分布図集 第2集」A 5判、460頁（写真12頁）。植物同好じねんじょ会発行（1981年12月）5,000円。

第1集に引き続き、今回100種を含む第2集が刊行された。膨大なデータ、標本に裏付けされた垂直、水平分布が示され、一目で概要をつかむことができ

る。長野県の植物も、多く調査されていて、たとえばリョウメンシダ、ヤマモミジ、コキンレイカなどの分布は、長野県植物誌にもよい参考となる。巻末には、本会会員でもある編集者が、ラショウモンカズラ型の植物分布を越冬様式を緻密に観察し、気候条件と対応させて解析している。（S. T.）